学級集団のなかにおけるひとりの生徒の指導

足利市立第二中学校　岡　田　明　男

1 はじめに

普通，生徒が学校を休むという場合には，健康を害したとか，家庭のある種の事情によることがそれ以外に，どうしても教師に納得いかないものがある。しかし，そうかといって，怠学児という印象はない。なぜこのように休むのか，はたからでは見当ばつかないが，まわりでは何とか学校へ行くように努力するのだが，本人は行こうとしない。ときには支度をして学校へ出かけても途中から帰ってしまう。

このように，客観的な理由はじゅうぶんには認められず，ただ本人の心理的な理由から学校へ行きたがらない状態を登校拒否というが，最近とくに注目され，その診断と治療，指導の問題が話題にのぼっている。そこで私の学級であつかったもので，ある程度成功したと思われるものをあげてご批判をあおぎたい。

2 事　例

1　問題の生徒

H，N　第二中学校２年　女子　１４歳

2　問題行動の発見

昭和４４年４月のある日，本校教頭の高橋先生が学校より下校の途中，友達とおぼしき生徒とつれだって帰るH，Nに会い何気なく話しかけられた。その際他の生徒は元気に応答したがこの子の応答は声も小さく，視線も伏しがちで，涙ぐんでいたという。最初は声をかけたことがわるかったかなと思ったが，また，何か問題をもつ子ではなかろうかとの疑いも残り，翌日生徒指導主任の須田先生にこのことを話すとともに全校生徒の写真の中からH，Nをみいだし受持ちに連絡してくださった。それが端緒となり観察をするとともに１年までの出欠状況を調べたところ，指導要録によれば「かぜと頭痛」という届けではあるが，真偽のほどがあやぶまれると思われた。

3 本人の現況

(1)　性格，学業

１年のときの指導要録の所見によると「おとなしく，無口で自閉的傾向が強い。意志が強い。」とあり，学業成績も音楽の３を除いて他はすべて２である。教室においてはおとなしく，むしろ目だたぬ存在であり，家庭に帰ってからも学習をほとんどしておらず，学習に対する意欲はないもちろん，課外の部活動もしていない。

(2)　諸検査

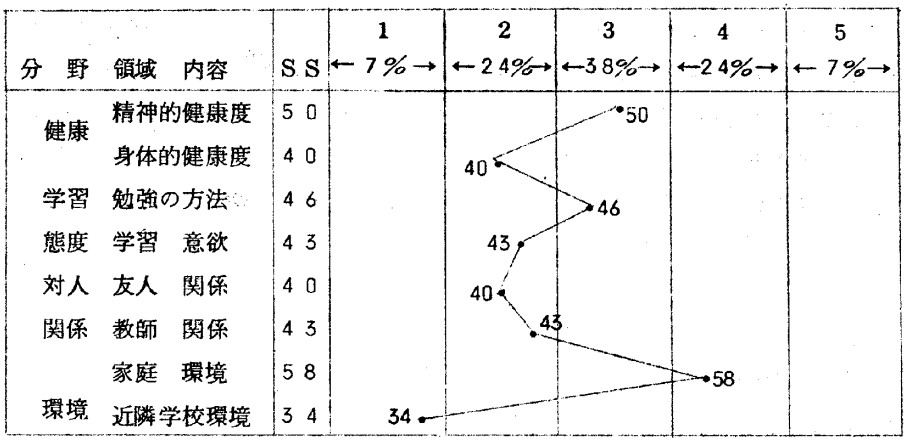
(ア)　東大A－S式知能検査（４３年６月実施）

(イ)　適応性診断プロフイール（４３年６月実施）

特　性	パーセンタイル	特　性	パーセンタイル
1　異常傾向	20	6　社会的技術	5
2　神経質傾向	20	7　統率性	0

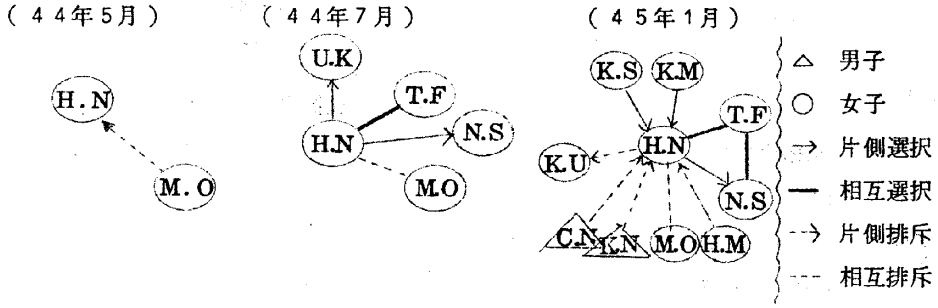
3 自尊傾向	20	8 家庭関係	30
4 退避的傾向	20	9 学校関係	50
5 自己統制	30	10 近隣関係	30
個人適応(1〜5)	20	社会適応(6〜10)	5

(ウ) FAT(学力向上要因診断検査)(44年6月実施)



総合診断 SS, 44, 44は,学業不振,学力の低下,登校の拒否,非行化傾向などの可能性をもつ。

(エ) ソシオメトリツクテスト(H, Nを中心としたもの)



(3) 本人の生育歴

出産は正常分娩,乳児期,幼児期とも発育は正常。ただし生後半年ほどは母乳,その後は人工乳で育てられたが,知能程度の低い老いた子守女に幼稚園にいくまで昼間お守りをされた。父も母も家業に追われ,母は現在住んでいる店の菓子の小売をきりまわし,父は婿であることと,支店でもあるので1Kmほど先の本店のアイスクリームの製造にたずさわり,妻の兄の店に勤めている。季節的なものを扱うので本店より帰るのが9時頃になり夕食が9時半頃になる。父も母も商人にしては,おとなしい消極的な性格と見受けられる。それには相応な背景も考えられる。それは本店,支店の関係と生徒の母親の父が監督とはいかぬまでも毎日のようにみえるということの影響である。母もこの子を産んで1年位のとき,半年近くも胃病のため,家をあけ,病院に入っていた。それでなくとも家族との接触の少ない商家の子どもであり,また両親の気質の影響,子守り女,ひとりっ子などの要因が大きいと思われる。

育っていく過程で，幼稚園，小学校と通うにつれて，何度となく宙返りをし，父親につれられて校門をくぐっても，ときどき泣き出すので見るに見かねて門から自宅に戻ることになったことも何度かあったという。

また家では，勉強の遅れをとり戻そうとして家庭教師をつけたり，ピアノに通わせたが，ピアノのおさらい会の後，演奏会を開くと聞いたとき，親に無断でやめてきた。その理由を聞くと，人前でやることがいやだといい，もし続けさせるなら，当日わざとまちがえるからといった。そんなことがあってピアノは止めてしまった。学習の指導に通つていた家庭教師も効果が上らない原因として，この子の性格形成に大きな関係をもつ家庭環境に問題があるのではないだろうかといってさじを投げたという。しかし，父親の話では家業の忙がしさにつれて，つとめて人前に出すことや，家の手伝いとして菓子の袋づめをさせながら，家の人との対話をはかってきたが効果がなかったという。けれども親類の人などとわりにしゃべることがあり，家の中と外でとの違いは感じられたという。

生徒指導のための参考資料　（４４年４月入学時の調査より抜粋

子供に対する家族の態度		ゆるやか
（学習）	勉強しますか	宿題しかしない
	勉強をみてやれますか	みてやれない
	家庭学習で困まっていること	ある。いそがしくて
	塾にいっていますか	いっていない
（家庭生活）	家事の手伝（きまっているもの）	ある。ふとんのあげおろし
	〃　（時々）	ある。食事のあとかたづけ
	両親に対する態度	わるい。反抗的へりくつをいう
（小学校のときのこと）	学校がすきでしたか	ふつう
	行動について注意されましたか	ない
	学校でのできごとを話しますか	ない
	友達の数は多い方ですか	いいえ（３人位）
（生まれてからのこと）	病気	別になし
	たべること（きらいなもの）　昆布	（すきなもの）　肉類　たべ方おそい
	ねること	ねおきが悪い
	大小便	便秘しがち
	ひふ	うみやすい
	ことば	無口
	こわがるもの	くらがり，虫，へび
	その他	きれいずき，はずかしがり，うち弁けい，動作おそい

4　家庭環境

父　４２歳，旧制中学校卒，菓子商（支店）本店での製造部門にたずさわっているので忙しくて，子どもと話し合う機会がもてない。わりとおとなしい性格のように見受けられる。婿という

ことにもよろう。

母，44歳，旧制女学校卒，自宅菓子小売(支店)店番をしており，商人の娘にしては小心のように思われた。人に積極的にものをすすめるようなところもみられない。消極的でかつ動作は機敏でないように思われた。

祖父，82歳，会ったことはないが人の話によると顔にやけどがあり，やけどを生じてから人と会うことが少なく，家にこもりがちである。支店にきて監督するようにみられるとのこと。

家庭の経済状況は，普通よりよいと思われる。

使用人は随時アルバイトなどを使うので2〜3人。

5　友人関係

小学校時代には，友達は2人ぐらいいたようだが，中学に入るとクラスが変わったのでおのずから疎遠となり，別に1年のときはこれという友達はなかったようである。2年になっても4月当初は級編成により親しくなれる友を得られなかった。その後ソシオメトリツクテストなどにより変化のようすがみられ，とくにTFとの関係が密になり，2月7日にはTFの家に泊り，その家族と旅行にいくほどに変わった。

6　原因

欠席の原因は，かぜと腹痛などだが，家を出るとき，学校にいってもおもしろくないということから，初めは嘘の腹痛も，いつのまにか本当の腹痛となり，いくのを嫌いやすむことになる。

学校がおもしろくない原因は，交友が少ないということと，勉強そのものについていけない。などによるが，特にこのHNからうける印象は，ひどく内向的であり涙もろさを感じ，友達への自分からの働きかけに乏しい。新しい環境への不適応ということから自然学校への足が遠のいたのであろう。

教頭の話と相まって，本人の性格，行動から考えて，休みの多いことにも疑いをいだき，家庭に連絡してみると，登校拒否症の軽い前兆とも思えた。孤立的，欲求不満の累積などにより問題が起因していると思えた。

7　指導

拒否の状況として，登校の準備はする。しかし登校時になると体のことを気にしたり，途中までいって戻ったり，全く行こうとしなかったりである。どうもこの拒否状況よりして両親を納得させるものも少なく，医者にいくことも嫌い，腹痛といい，生理痛といい行動に一貫性がなく，その場その場の気分によって支配され，1人娘ゆえ親も溺愛の傾向があったとみられる。あまり休みが多いので5月の家庭訪問のとき父親と対談し，子どもの生育歴，性格をきくことにより，前述のような生育歴の上に，ひっこみ思案，はにかみや，内気，口数が少ないなどの点がわかった。故に逃避的であり，いつも学校から帰宅すると2階の部屋にこもって，1人でししゆうをしたり，グループサウンズのレコードを聞く程度のことである。5月の家庭訪問後，しばらく登校をつづけたが6月になると連続して休んだ。その後父親が学校にみえ，須田先生と私で治療方法について考え，まず人格的特徴のは握を中心において話しを進めた。そこでは，安全への欲求が強く，しかもその充足は他者に依存する傾向が顕著であり，自立的なところが乏しく，その結果自分自身に無力感を感じ

やすい，その行動傾向には両極性があって極端から極端へと行動が移りやすいので，つとめて心理的規整として柔軟な態度をとることとした。それには父親のみならず家族のものとの面談を要することを痛感し，まず親から始じめた。

6月11日，母親に本人には内証で学校に来てもらい須田先生と私で話し合った。そしてこの子にとって家での対話の不足していること，一面金が自由になるので自己中心的な自己主張が強く，テレビのチャンネルも1人で独占し，ときに2階で11時すぎまでみる。副食も好きな果実だけ買わせるというように，思考の形式も自我中心である。このことからも知能は普通だが，体質的にも神経質であることがうなづける。まず親に数多い接触の場を願い，子どもにも仕事を手伝わせ，励ましの場をつくることをたのむ。

6月の後半になっても休みが時折りあり，学校に父親につれられてくる。私があずかってわけを聞くと，腹が痛いとのこと，症状を聞き養護の黒川先生のところに連れていき，2時間目にようすをみにいくと，ベットにいたので，いろいろと話をし帰宅させる。その間にも養護の先生には話をする場をつくってもらった。

それからも4〜5回父親に車で送られてきては，作業員室で待ち私が受け取ることにし，ようすをみて，強引に保健室に，ときに教室にいかせた。まだその頃には対人関係ということについても具体的にどういうようにすればよいかわからないで過ごしてきた。

7月14日には，生徒自身が学校へ電話をかけ，Nですがきよう休みますと告げ，理由を聞くまもなく電話を切ったと受けた先生から連絡があった。私も授業の空き間をみて生徒の宅に電話したところ母親より，きよう登校途中で帰宅してしまったが，理由をきくとあまりにもはっきりしないので，母親が「自分で電話しなさい。」といったとのこと。教師としてにえきらぬものを感じる。そのうち夏休み近くになっても休むので，ついに空き時間をみて家庭訪問をし，母親に会い，つとめて対人的接触の場を設けることの話し合いを勧め，それもさりげない勝手の手伝いや店の手伝いの時，話を引き出すようにすべきことを話した。母親にも子どもと同じような共生的感情を認めるので，心理的な面であたたかい人間関係を樹立させようと考え，映画や買物など一緒にすることをすすめた。

また指導センターの和田先生にも相談にのっていただくようお願いしておいたので7月23日に父親と一緒に行っていろいろと参考意見をうかがった。

その後8月中旬に本人には理由を告げず父親は指導センターへつれて行った。ところが帰宅して，しばらく口もきかないので困ったとのこと。飛んできた父親からどうしたものかと相談されたが，私にとっても初めての経験であり，本や人の話の知識しかないので，これといった効め手がない。一緒に遊んでやって欲しいぐらいの程度を話すにすぎない。

8月下旬林間学校に参加，一緒にすごすうちに交友を得たらしい。

9月になって幾日か休んだが，幾分，明るい兆を見たような気がした。それはソシオメトリツクテスト（7月）による。TFとの相互選択がより強まったと思われる。Nが父親に送られて学校の作業員室にくると連絡があり，私が行くと，いつとなくTFがきて教室につれていくようになった。そこでTFを中心に班をつくらせこの二人を結びつけながら，仕事も勉強もさせることを通して，

心を安定させることにつとめた。小集団の活用において退避的な生徒を，より似かよったものとあるいは積極的なものと結びつけるという方法をとろうと試みた。仲間づくりをすることによって社会的承認を得，安定感をもち自信がつき，明るくなる。ひいては集団の中で適当なかつ満足した地位を獲得することであろうと思った。つとめて学級集団の中でのＴＦの応答から人間関係に芽ばえてきたＮの一端をのぞけた。

１１月，１２月になっても，休む日はあったが，しだいにその理由を，よく日の朝学級指導のとき教卓の前にきて，はっきり理由を言えるようになった。座席替えも，２学期になって何回も行なったが，この二人の場合，自然の状態でペアでもっていくように配慮した。

１２月の終業式の日，転校する生徒の送別会を学級で簡単な菓子とコーラでやった。その際，転校する生徒に１人１言のはげましの言葉を，はっきりいったのを聞いて私は秘かに喜んだ。Ｎに対する親の配慮も，その上交友関係の上においてもよい結果が表われてきているような気がした。それでも冬休みという間をおいて，登校するかどうかが心配であった。

３学期にはいると，幾日かはやはり休み，またかとがっかりさせられたが調べたところ，これはかぜであり，間もなく登校しだした。３学期始めのソシオメトリツクテストに基づき班の編成をした。そのときもＮとＴＦは同じグループにし，それにＴＦと仲のよいＮＳも加えた。このことは成功だと思った。というのは，２月初めの親と子と教師の三者懇談の席で将来の進路とならんで，生活行動を中心にした話のなかで，朝の登校，帰りの下校時，ＮＳとＫＳが一緒であることがわかり，よかったと思った。

また２月７日の晩，Ｆの家に泊まり，その家族と浅間高原に行って来たということより，楽しそうに話してくれるＨＮをみて交友関係の大切さを感じた。やはりその子をとりまく環境の大切さが必要であるとつくづく思った。

３ おわりに

教師は毎日全員が学校に登校し学習，クラブ，部活動に，そして仲間とのかたらいに過ごせることを願いながらも，子どもによって心理的支障を生じ，登校を拒否してしまうことがある。その程度には軽重があろうが，私のあつかったのは，ほんの軽いくちであろう。しかし，中学校教育には個人として指導の限界がありそこで私の級に出る全教師の観察と指導によって，登校への糸口をつかんだと思う。そしていまＨＮは後期の給食係として副食のもりつけに白いかっぽう衣をきて活躍している。この子もフオロワーとしての経験とともに大なり小なりのリーダーとして活動の場を与えていきたい。かつこれに加えて，家庭との緊密な連絡の上により望ましい人間関係を樹立していきたいと思う。今後これを手ばかりにひとりひとりの子どもの個性をより伸ばしていきたい。

これをまとめるに際して校長先生のご指導と助言によったことを感謝します。

（　評　は石井先生の論文と一緒に書かれているので，それを参照されたい。）